

## ブレイクと妖精詩

——ブレイク『のっぽのジョン・ブラウンとちびのメアリ・ベル』

『ウィリアム・ボンド』を読む——

松島 正一

ウィリアム・ブレイク（一七五七―一八二七）の『ピカリング稿本』（一八〇一―五年に執筆）には十編の詩が収められているが、妖精の登場する作品が二つある。『のっぽのジョン・ブラウンとちびのメアリ・ベル』（"Long John Brown and Little Mary Bell"）と『ウィリアム・ボンド』（"William Bond"）である。両作品とも主題は「愛」を扱っていると考えられるが、所載順に『のっぽのジョン・ブラウンとちびのメアリ・ベル』から読んでみよう。

ちびのメアリ・ベルは木の実の中に一人の妖精を養っていた。

のっぽのジョン・ブラウンは腹の中に悪魔を養っていた。

のっぽのジョン・ブラウンはちびのメアリ・ベルを恋した。

そして妖精は悪魔を木の実の殻の中に引っ張り込んだ。

メアリの妖精は木の実の殻から入ったり入ったりした。

妖精は悪魔が「恋は罪だ」と言うのを笑った。

悪魔は暴れ、怒り狂った。

そして悪魔は若者のスープの中に入った。

悪魔はじきに恋に狂う若い男の腹の中に入った。

というのもジョンは恋の苦しみを追い出すために食いかつ飲んだから。

だがジョンができたことは日ごとに痩せ衰えたことだけ、

食事は人の十倍も食いかつ飲んだのだけ。

ジョンの胃の腑の中には昼も夜も狼がいるという人もいた。

悪魔がいるという人もいたが、その推量は当たっていた。

妖精は彼の栄光、喜び、誇りにつつまれて跳びはね、

哀れなジョン・ブラウンが死ぬまで悪魔を笑った。

そこで妖精は古い木の実の殻からとび出した。

かわいいメアリ・ベルには悲しく哀れなことよ。

というのも妖精が出ていくと、悪魔が入りこみ、

あそこに行くのはかび臭い古い木の实を持ったミス・ベルだよ。

G・K・チェスタトンはその書『ウィリアム・ブレイク』（一九一〇）で、この詩の第一連をどんな意味かと考えて「冬の夕方を幸福に過ごした多くの教養ある家庭」を知っていると述べている。「のっぼ」「ちび」、またメアリやジョンを子供として、一種の伽話のようにこの詩を読んでいる風景をチェスタトンは頭に浮かべているのかもしれないが、この詩は教養ある家庭の人々が皆んなで楽しく議論をしながら夕べを過ごすようなものではなさそうである。

第一連に登場するのは「木の実」の中に妖精を養っているメアリと、「腹」の中に悪魔を養っているジョン。そして妖精が悪魔を引っ張り込んだところは「木の実の殻」。ここに男女の性行為が暗示されているのは明白である。

第二連でメアリがジョンを拒絶したことが明らかとなる。その理由は「恋は罪である」から。ブレイクは他にも「女の愛は罪である」（『ヨーロッパ』三七行）と述べているように、女性の愛は男性を破滅させるという考えを一貫して抱いている。

第三連で悪魔はジョンの腹の中に入り、ジョンは自己の性的な欲求不満を食べることで解消しようとする。しかし、それによって彼の不満が解決されるわけでもなく、ますます身体が痩せ衰えていく。

第四連でジョンは死ぬ。悪魔は妖精に敗北したのだ。しかし、勝利したはずのメアリに幸運が訪れなかった

ことが最終連で判明する。悪魔に勝利したはずの妖精がメアリから去ると、今度は悪魔がメアリに入り込み、その結果、彼女はひからびた「かび臭い木の実」を持った老女となる。

S・F・デイモン（ウィリアム・ブレイク その哲学と象徴）は、悪魔をビュリタンの良心、妖精を生命の喜びを表わすものと扱っている。これに對して、妖精を誘惑的な女性の力、悪魔は積極的なエネルギー、つまり心理学用語でいうリビドーと扱える者もいる。

ブレイクの作品に妖精がしばしば登場することはよく知られている。『ヨーロッパ』（一七九四年彫版）は妖精の口をかりて、ジョン・ロックの五感に対する批評から始まる。そこでは妖精は自然の喜び、抑圧されていないエネルギーの発露を代弁するものとして登場する。またミルトン『沈思の人』への挿絵では、妖精たちはミルトンの抑圧された夢の中で、若きミルトンの頭上を回っている。ここでも、妖精は性的快楽の精霊と考えられている。ブレイクは『解説目録』（二八〇九）で妖精を定義している。彼は「シェイクスピアの妖精は植物界の支配者たちでもあるが、チョーサーの妖精も同じである。二人の詩人をそう考えた時に初めて、チョーサーが理解できるであろう。しかもシェイクスピアと別にしてではない」と述べている。

これだけでは、ブレイクが妖精をどう考えていたのか、あまり明瞭ではない。そこでブレイク作品を民衆詩の伝統のなかで扱えた興味深い研究書を紹介しよう。ジョン・アドラード『残虐に翻弄されるもの——ブレイク作品にみられる妖精、民謡、魔力、そして故事』（一九七二）がそれである。彼はスコットランド、ウェールズをも含めて英国の地方の伝承を収集し、ブレイクがいかにそれに負っているかを立証する。彼によれば、ブレイクの時代に行われていた説教では、サタンと男根は同一視されてきて、「*the cock*」（「腹」）、「*the long*」（「腹」）、「*the gaw*」（「腹」）

「木の実の殻」("nut-shell")などの語には民衆詩特有の「性的な」意味が隠されている。

このような観点から、もう一度この作品をみてみよう。

妖精は「木の実の殻」から出たり入ったりして、男の欲望をじらす。しかし、「愛は罪である」という原理に基づいて悪魔<sup>ファズ</sup>を拒む。拒まれた悪魔はジョンの「スーブ」の中に入り、そこから「腹」の中に入っていく。ジョンは満たされない性欲を食欲で満たそうと、人の十倍も飲み食いするが、日ごとに瘦せ衰える。食欲では性欲の代理とはなれないのである。ジョンを殺すことに成功した妖精はメアリの「古い木の実の殻」からとび出す。もう妖精の役割は終わったのである。代わりに悪魔が入り込むが、すでに年老いたミス・ベルには性能の「かび臭い古い木の实」しか残っていない。彼女の欲望は永久に成就されることはない。

この作品でうたわれているのは、自己の欲望に正直でなかった女性の悲劇である。ブレイクは「欲望を抑える者はその欲望を抑えつけられるほど弱いからそうするのである」(『天国と地獄の結婚』五〇六図)と述べているように、抑えられるような欲望は本ものではないと一貫して主張し続けている。ブレイクはこの作品で、妖精と悪魔の対立という枠組をかりて、男女の愛のあり方、つまり人間の実存の在り方をアイロニカルに描いたのである。

次に『ウィリアム・ボンド』を考察してみるが、この作品はブレイク全作品のなかでも最も難解な作品の一つであるとエリス&イエイツは述べている。難解かどうかはともかくとして、不可解な作品であることは確かである。

詩はこのような奇妙な問いかけで始まる。

娘たちは気が狂っているのだろうか、

そして彼女たちは男を殺すつもりなのだろうか。

ウィリアム・ボンドは死ぬのだろうか、

確かに彼はとても具合が悪いのだから。

語り手は、女たちがどのようにしてウィリアムを殺そうとするのかは述べていない。彼の病いは何なのか。

R・B・ケネディはウィリアムの病気はナボテのぶどう畑を金で譲ることを拒まれた時のアハブの病気（『列王紀上』第二十一章）を思い出させると述べている。つまり、ウィリアムもアハブもともに極端な欲求不満から生じた心身の病いということとなる。また、ジェイムズ・ジョイスは『若き芸術家の肖像』の最後の日記の部分（五月二十四日）で、「図書館へ行った。論文を三編読もうと思った。駄目だった。彼女はまだ出てこない。ぼくはあわてているのだろうか。何に対して？ 彼女がもう二度と出てこないかもしれないことだ」と記したあとで、ブレイクの詩を引用する。「ウィリアム・ボンドは死ぬのだろうか、／確かに彼はとても具合が悪いのだから」と。そして、ステイブンは「ああ、可哀いそうなウィリアム！」と絶叫する。このような文脈から判断すると、ジョイス（あるいはステイブン）はウィリアム・ボンドの病いを恋の病いと捉えていることは明らかである。

さて、具合が悪いウィリアムは教会に助けを求めに行く。

彼はある五月の朝に教会へ出かけた、

妖精たちに一人、二人、そして三人と付き添われて。

しかし神意の天使たちは妖精たちを追ひ払った、

そして彼は苦悩のうちに家に戻った。

彼は畑にも羊舎にも出かけなかった、

村にも町にも出かけなかった、

しかし彼は黒い黒い雲に包まれて家にやってきた、

そして寢床に行つて、そこに横になった。

ウィリアムは妖精たちに付き添われて教会に出かけたわけだが、妖精とは男の欲望から命令をうけ、それを女性の欲望に伝える存在である。ブレイクの象徴体系では「火」を代表するフーズン（Fuzon）がこの役割を果たすことになる。

しかし妖精は教会にいた「神意の天使たち」に追ひ払われてしまう。神意と訳したのは原詩で“Providence”であるが、この天使たちは既制宗教の教義<sup>ドグマ</sup>、道徳律を代表するものと考えられる。ブレイクの

後期預言書の一つ『ミルトン』では、「永遠に任務についている神意の天使たち」（二八・六〇）と神の目を与えられた者として登場するが、この作品『ウィリアム・ボンド』では否定的存在として描かれている。つまり『ヴェイラ』で「分かれるのだ。汝ら隊をなす者たちよ、勢力勢力に応じて」（Ⅱ・二三）とあるように、分割を促進させるもの、ボンドの欲望を抑圧する勢力が形をとったのが「神意の天使たち」である。また『ジェルサレム』（五〇・四一五）で言及される「一つの人殺しの神意」、旧約聖書で町々の略奪を命じ、無実の者に大虐殺を命ずる者でもある。この「神意」は肉体を破滅させることで魂をも破滅させる存在なのである。

ウィリアムの病いは癒やされず、ますます病いの重くなった彼は畑にも羊舎にも、村にも町にも出かけなくなってしまう。彼はユリゼンの黒い雲に包まれ、ついに床に臥してしまった。

ウィリアムの病床の様子はこう描かれている。

そして神意の天使が一人彼の足のところに

そして神意の天使が一人彼の頭のところに

そして真ん中には黒い黒い雲、

そして真ん中には床についた病気の男。

そして彼の右手にはメアリ・グリーンがいた、

そして彼の左手には妹のジェインがいた、



そして彼女たちの涙が黒い雲を通り抜けて落ちた

病気の男の痛みを追い払おうとして。

ユリゼンの暗い雲の中の最も暗い所に入ってしまったウィリアムは死の準備につく。彼を抑圧する者たちがその死を見守るために彼の回りに集まる。一人の天使が足のところ、もう一人の天使が頭のところ。そして右手にメアリ、左手に妹のジェインが位置する。ここに十字架にかかったイエスの姿が重なる。しかし、ウィリアムは愛のためではなく、道徳のゆえに死ぬのである。

憔悴したウィリアムを見かねたメアリは、ウィリアムに次のような自己犠牲的な言葉をかける。

「おおウィリアムよ、もしあなたが別の人を愛するのなら、

別の人を哀れなメアリよりもっと愛するなら、

その人のところに行つて、あなたの妻にしなさい。

そうしたらメアリ・グリーンは彼女の召使いになりましょう」

このメアリの言葉に対して、ウィリアムはこともなげにこう答える。

「そうなのだよ、メアリ、私は別の人を愛している、

別の人をおまえよりもずっと愛している。

そして別の人を私は妻にしよう。

それなら私はおまえと何の関係があるう

ここで、ウィリアム・ボンド (William Bond) とメアリ・グリーン (Mary Green) の名前を考えてみよう。

ボンドには束縛の意味が隠されているのは明白である。ブレイクは「男は女に縛られている」という考えを一貫して持ち続けているのは前にも述べたとおりである。

メアリ・グリーン の「グリーン」には「緑(の)」の意味が含まれている。言うまでもなくメアリはキリストの母親の名前でもある。ウィリアムの「私はおまえと何の関係があるうか」(“:: what have I to do with thee”)は、「イエスは母に言われた『婦人よ、あなたは、わたしと、なんの係わりがありますか。わたしの時は、まだきていません』(『ヨハネによる福音書』二・二三)」（日本聖書協会訳）が典拠である。イエスがサタンと母を拒んだようにウィリアムはメアリを拒んだのである。

メアリは愛するウィリアムが自分以外の女性を愛していることを本人から聞かされ、恋敵に対する敗北を認めざるをえない。

「というのはあなたは物悲しく青ざめている、

そしてあなたの頭には冷たい月の光がある、

しかし彼女はバラ色で日中のように輝やかしい  
そして太陽の輝きが彼女の目から出てまぶしい」

メアリは自分を「月の光」、恋敵を「太陽の輝き」とたとえ、月の太陽への敗北を宣言し氣絶してしまふ。

メアリは震え寒けがした、

そしてメアリは右手の床に倒れた。

ウィリアム・ボンドと妹のジェインは

二度とメアリを正氣に戻すことはできなかった。

氣絶したメアリはほとんど死なんばかりであつた。ところが目が覺めてみると、自分がウィリアムの右手に横たわっていることに氣づく。妖精たちがメアリのところに戻ってきて、神意の天使たちは寢床から去る。今、ウィリアムは自分が真に愛しているのはメアリだと認識するのである。

メアリが氣がつき、自分が

いとしいウィリアムの右手に

彼の愛する寢床の右手に横たわっているのを知り、

ウィリアム・ボンドをととても近くに見たとき、

ウィリアム・ボンドから逃げた妖精たちは

メアリの光り輝く頭のまわりで踊った。

妖精たちは白い枕の上で踊った、

そして神意の天使たちは寝床を去った。

最終二連はこの詩の主題を要約しているが、実はこの二連にはテキスト上の問題が存在する。この「私」を詩の語り手とするか、それとも登場人物のウィリアム・ボンドと考えるのかの問題である。ウィリアムと考えるテキスト編纂者は最終二連に引用符をつけるが、ここでは語り手の言葉として訳しておく。

私は愛は熱い太陽の中に住んでいると考えた、

しかし、おお愛は月の光の中に住んでいる！

私は愛を日中の暑熱の中に見つけようと考えた、

しかし甘美な愛は夜の慰め手なのだ。

愛を他人の悲哀の憐れみのなかに捜せ、

別の人の心労のやさしい除去のなかに、

夜の闇と冬の雪のなかに、

裸で見捨てられた者のなかに、そこに愛を捜せ。

メアリの自己犠牲的な愛がウィリアムを動かし、真の愛にめざめさせた。彼は愛は太陽のまぶしい光と誇りの中にではなく、月光の穏やかさの中に在ることを認める。ブレイクの象徴体系では月はビュウラの象徴である。

この詩はバラッドの手法を用いている。トマス・パーシーの『イギリス古詩拾遺集』(Reliques)によくみられるバラッド・ミーターで書かれ、妖精と天使という象徴を用いた物語詩といえる。しかし、解釈がもう一つすっきりしないことも確かである。この問題を解決する手段として、従来この詩はブレイクの伝記と結びつけ、私小説的に読む読み方が行われてきた。

扱われているテーマは「愛」であるが、この作品には「一夫二婦」("concubine")の問題がある。確かにブレイクの詩作品には他にもこの問題を扱った作品がかなり多くある。ウィリアム・ボンドはウィリアム・ブレイク自身のごろ合わせであると考えるなら、メアリ・グリーンは誰か？ブレイクの妻であるなら何故、キティ・ボンドとして登場しないのか。この詩は発表されず、原稿のまま残されたものであるのだから、ブレイクが妻に遠慮する必要はなかったのではないか。妻にも秘密にした「別の人」がブレイクに存在したのか？

病床のウィリアムの右手にメアリがいた。左手には妹のジェーンがいた。ブレイクの妹はフェルバム滞在中、

ブレイク夫婦とともにいたが、ブレイク、ケイト、妹の間に三角関係があった記録はない。

伝記的な面からの解釈はこの詩に関してある点までは有効であるが、最後には壁につきあたってしまう。

妖精の登場する作品はこれ迄に論じた二編以外にも数多くあるが、最後にブレイクの伝記のうえでも興味深い作品を紹介しておこう。その作品は『バッツ夫人への不死鳥』(“The Phoenix to Mrs Butts”)で、従来の全詩集には収録されていない未刊の詩である。これを発見したのはサー・ジェフリー・ケインズであった。彼の論文(T・L・S・一九八四年九月十四日号)に依って話をすすめる。

あるとき、ケインズは大英博物館からブレイクの署名のある一編の詩を見せられ、ブレイク研究の泰斗としてその真偽に関して意見を求められた。彼はそれがあまりにも本物らしすぎて最初は功妙な偽作ではないかと思つたようだ。作品の出来栄があまり芳しくないように思えたのも偽作と疑つた理由であつた。

しかし所有者オウエン・D・ロングの身元の正しさを知り、筆跡鑑定を専門家に依頼した結果、正真正銘のブレイク作品と判明した。詩で歌われているバッツ夫人はトマス・バッツ(一七五七—一八四五)とは再婚であつた。彼女はその前はノース夫人で、夫との間に娘を儲けており、原稿の所有者オウエン・D・ロングはその孫にあたる人であつた。夫人の遺したものが、ノース家において子孫代々大切に受け継がれ、その遺品のなかにこの詩があつたのである。

『バッツ夫人への不死鳥』は僅か二十四行の作品であるが、「鳥」と「妖精」との関係で、ブレイクからバッツ夫人への愛の告白が描かれている。夫人の魅力の虜になつてしまった「鳥」。その「鳥」の気持に対して

「妖精」も「鳥」に愛を打ち明けるが、「鳥」は自分は子供の「無垢な愛」を享受しているので十分だと言って、「妖精」の愛を拒む。「私」の胸に飛んで来た「妖精」に対して、「私」は「妖精」に何をなすべきかを教える。およそこんな内容であるが、題目からも察せられるように、この詩にはシェイクスピアの『不死鳥とキジ鳩』（"The Phoenix and the Turtle"）のヒーローがあるように思う。

では最初に原詩をあげ、訳をつけてみる。

The Phoenix to Mrs Butts

I saw a Bird rise from the East  
As a Bird rises from its Nest  
With sweetest Songs I ever heard  
It sang I am Mrs Butts's Bird  
And then I saw a Fairy gay  
That with this beauteous Bird would play  
From a golden cloud she came  
She call'd the sweet Bird by its name  
She call'd it Phoenix! Heavens Dove!  
She call'd it all the names of Love  
But the Bird flew fast away  
Where little Children sport & play

And they strok'd it with their hands  
All their cooe's is understands  
The Fairy to my bosom flew  
Weeping tears of morning dew  
I said : Thou foolish whimpring thing  
Is not that thy Fairy Ring  
Where those Children sport & play  
In Fairy fancies light & gay  
Seem a Child & be a Child  
And the Phoenix is beguild  
But if thou seem'st a Fairy thing  
Then it flies on glancing wing

William Blake

バツ夫人への不死鳥

わたしは一羽の鳥が東から昇るのを見た、  
ちょうどその巢から昇るように  
これまで聞いたこともない妙な歌をうたいながら。  
鳥はうたった「わたしはバツ夫人の鳥です」と。



それからわたしは美しい鳥と遊ぶ

一人の陽気な妖精を見た。

妖精は黄金の雲からやってきて、

その美しい鳥を名指しで招き、

その鳥を不死鳥！ 天上の鳩！ と呼んだ。

妖精はその鳥をありったけの愛の名で呼んだが、

鳥は素早く飛んでいってしまった。

子どもたちが遊び戯れているところへ。

子どもたちがその鳥を手で撫でると、

子どもたちの呼び声をすべて鳥は理解する。

妖精は朝露のような涙を流しながら

わたしの胸のなかに飛んできた。

わたしは言った「汝、愚かで哀れな者よ、

それは汝の妖精の指環ではないのか、

子どもたちが遊び戯れているところでは。

妖精のなかでは明るく陽気な想いは

子どものよう、子どもそのものである。

そして不死鳥は欺かれる。

だが、もし汝が妖精のようなものなら、

そのとき不死鳥はきらめく翼で飛んでいくのです」

少し説明を加えておこう。「鳥」であるブレイクが東から昇るのは、当時ブレイクがテムズ河の東のランベスに住んでいたから。バッツ家はランベスの少し北、テムズ河の西のグレイト・マールバラ・ストリートにあった。ブレイクの体系によると、東の方位は感情、西は肉体、南は理性、北は想像力のゾアが住む。愛と感情を司るルーヴァ（"Luvah"）の住む地域から「鳥」が、西の肉体に向かう。ここに性的な暗示があるだろう。

ブレイクはこの詩をバッツ夫人に送ったわけであるが、トマスとの間に三角関係が生じたわけではなかった。ブレイクは感情の自由を信じたが、現実生活では道徳的な男であった。ブレイクとトマス・バッツとの厚い友情は『ブレイク書翰集』を繙くとよくわかる。また、夫人が教養あふれる美しい女性であったことも手紙に添えられた「バッツ夫人へ」なる六行の詩からもわかる。彼女はブレイク作品の中の女性像にもかなりの影響を与えたといわれている。

ブレイクはこのバッツ夫人との「事件」を『ノートブック』に記した。ケインズの考えによれば、それが最初は『結婚指環』（"The Marriage Ring"）と題され、後に『妖精』（"The Fairy"）と改題された「謎」の詩であった。確かにこの『バッツ夫人への不死鳥』を通してみると、これ迄不可解な詩とされていた『妖精』の解釈も容易となる。

[The Marriage Ring *del.*] The Fairy

"Come hither my sparrows,  
 "My little arrows.  
 "If a tear or a smile  
 "Will a man beguile,  
 "If an amorous delay  
 "Clouds a sunshiny day,  
 "If the [tread *del.*] step of a foot  
 "Smites the heart to its root,  
 "'Tis the marriage ring  
 "Makes each fairy a king."

So a fairy sung.  
 From the leaves I sprung.  
 He leap'd from the spray  
 To flee away.  
 But in my hat caught  
 He soon shall be taught.  
 Let him laugh, let him cry,  
 He's my butterfly;  
 For I've pull'd out the sting

[And del.] Of the marriage ring  
[One line del. and illegible.]

〔結婚指環〕妖精

こちらに來なさい、わたしの雀たちよ  
わたしの小さな矢たちよ。

もし一粒の涙か一つの微笑が

一人の男を欺くなら

もし恋の延引が

暗天の日を曇らせるなら

もし一步の「ひと踏み」歩みが

心臓をその根まで強打するなら

それは結婚指環

それぞれの妖精を王様にするのは。

こう一人の妖精が歌った。

木の葉の間からわたしはとび出た。

彼は小枝からとんだ

逃げようとして。

だが、わたしの帽子の中につかまって

彼はやがて教わることになるだろう

笑わせておけ、泣かせておけ

彼はわたしの蝶なのだ。

というのも、わたしは針を抜いてしまった

〔そして〕結婚指環の

〔馬鹿なもの〕〔子どもの遊び道具〕